

平成28年度第1回山梨県スポーツ推進審議会
会議録

1 日時 平成28年12月26日(月)15時00分～16時15分

2 場所 山梨県庁防災新館 4階 405会議室

3 出席者

(1) 委員 11名

浅利そのみ、飯島節生、飯田忠子、岡田恭子、川上琴美、齋藤与、佐藤正仁、
田畑雅宏、土屋直、土屋ひとみ、野呂瀬秀

(2) 教育委員会事務局

スポーツ健康課長、主幹、担当職員5人

4 傍聴者等の数 なし

5 会議次第

(1) 開会

(2) 会長あいさつ

(3) 議事

(4) 閉会

6 議題

[報告事項]

平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について(資料1)

希望郷いわて国体の結果について (資料2)

7 議事の概要

平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について、報告する。

(事務局)

平成28年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について、資料1に基づき、説明。

(委員)

昨年度の調査結果に比べ、数値が伸びている理由は何か。

(事務局)

各学校で、1日60分以上の運動をするという「健康・体力づくり一校一実践運動」に取り組んでいることや、数値の上昇が大きかった中学校については、体育の授業や運動部活動を含め、昨年より総運動時間が伸びていることが要因ではないかと考えられる。

(委員)

オリンピックでメダルを獲得した選手などの中には、就学前からスポーツに親しんでいる者もいると聞いている。就学前の子どもに対する対策を取れば、もっと数値が向上するのではないか。

(事務局)

未就学児に対する施策は福祉部局が主に担当しているが、教育委員会としても、小学生の体力向上のためには、幼児期や低学年からの対応が必要と考えている。これらの子どもに対して、遊びながら運動に親しむような取り組みを始めている。

(委員)

中学校については、小学校に比べ、全国順位が高いが、運動部活動との関連はあるのか。

(事務局)

運動部活動を行っている子どもは、1日2時間以上運動しており、運動時間に比例し、体力合計点が高い傾向となっている。

運動部活動の加入率をみると、高等学校の運動部活動の加入率は、全国と比較し、高いと聞いている。中学校も同様に、全国平均と比較し、高い加入率となっている。

なお、小学校5年生の男子の運動部活動の加入率は、全国平均が28.9%、山梨県は19.6%。小学校5年生の女子の運動部活動の加入率は、全国平均が20.0%、山梨県は11.2%となっているが、地域のスポーツクラブへの加入率については、男女ともに、全国平均を5ポイント程度上回っており、運動を行っている率は全国と比較しても大きな差はない。

(委員)

スポーツ少年団の団員数は、10年前と比べ、どうなっているのか。

(事務局)

スポーツ少年団の団員数は、H17年が15,063人、H27年が9,969人と、少子化の影響などで減少傾向となっている。

(委員)

スポーツ少年団の団員は減少傾向とのことだが、これに総合型地域スポーツクラブの参加者を加えるとスポーツ人口は増加傾向ではないかと思う。総合型地域スポーツクラブの参加者数は把握しているのか。

(事務局)

山梨県内には、設立済みの総合型地域スポーツクラブは29クラブあるが、様々な参加の仕方があるため、一律に参加者数を把握することはできない。

(委員)

スポーツをやる人、やらない人の二極化が進んでいると思う。スポーツをやらない子どもへの対応はどうしているのか。

(事務局)

運動が嫌いな子どもや苦手な子どもに対し、子どもの体力向上事業として「地域で取り組む学校元気アップ事業」を実施している。これは、休み時間などを利用し、遊びを通じて、体を動かすことの楽しさを気づかせ、これを動機付けとして、運動の習慣化につなげるもの。現在は、モデル校を15校指定して取り組んでいるが、これを県内各地に広げていく。

各小学校に対する調査によると、運動が苦手な子どもに対する取り組み率は、山梨県は37.8%だが、全国順位の高い秋田県は87.9%、茨城県は76.9%と、上位県に比べて低いという結果が出ている。中学校では、50%と半数が取り組みを行っているが、中学校の1位である福井県では72.7%。全国順位が上位の都道府県では、運動が苦手な子どもに対する取り組みを行っていることがうかがえる。

なお、県が行っている取り組みを評価していただくために、H27年度から体力向上委員会を設置し、様々な方から御意見を頂きながら、体力向上に向けた取り組みを進めている。

(委員)

長野県のとある高校には、トレーニングのために、徒歩で通学している意欲のある選手がいると聞いている。このような意欲のある選手を養成するために、県で何らかの取り組みを行うことはできないのか。

(事務局)

個人の問題であり、そこまで県で踏み込むことは難しい。

(委員)

子ども達を取り巻く状況は、「忙しい」と言うことがあると思う。過去に勤務していたへき地の学校では、スクールバスがなく、子ども達は徒歩で通学し、放課後も校庭などで遊んでいた。しかし、隣の学校では、スクールバスがあり、決まった時間に帰宅しなければならなかった。また、都市部の学校でも、危機管理や安全・安心の面から、同じ方面の子どもが集まり、決まった時間に一緒に下校している。こういったことから、好きな運動に取り組むとか、みんなで一緒に運動するといった時間が少ないような気がする。こういった状況から、学校現場では、一校一実践運動として、縄跳び、持久走や児童会でスポーツを取り入れたゲームを行うなど、様々な取り組みを行ってきたし、現在も取り組んでいる。

社会情勢により、スポーツ健康課の取り組みだけでは難しいという状況がある。どのような取り組みを行っていけば良くなるのかを考えていくのが、この審議会だと思う。

(事務局)

教育委員会だけではできない部分もあり、福祉部局や警察、市町村などとの連携を図りながら取り組みを進めている。委員の皆様からも御意見を伺い、今後の参考にさせていただきたい。

(委員)

子どもの体力が低くなっている要因やその対策は、4つあると考えている。

1つ目は、体力に対する保護者の関心が昔に比べ低くなり、体力を付ける必要性を保護者が感じていないという点。総合型地域スポーツクラブなどで運動している保護者の子どもは、運動部活動に加入している者や運動が好きな者が多い。2つ目は、生活が利便化しているという点。雨の時や買い物の際に、車ではなく徒歩で移動するだけでも、体力向上に繋がる。3つ目は、「時間、空間、仲間」の三間が減少している点。塾などにより時間がないことや地域の子どもの数が少ない状況がある。4つ目は、体育教師の考え方を変える必要があるという点。体育の授業は運動を好きになることのきっかけとなる。運動をしない子どもに対し、何らかのアプローチを心がけなければならない。

いずれにしても、全国での順位が上がったことより、昨年より体力合計点が上がったことが大事。それを続けていくことが大切なことと考える。

(委員)

学校と地域をつないでいくことが大切なことだと考えている。地元のスポーツ推進協議会では、市内の各小学校と協力し、体力検定を8年間続けている。このデータから、投げることや闘志の面が弱いことが分かった。こういったデータを元に、各学校に対し、遊びから学校体育を支える取り組みをしている。さらに、小さい頃から、ボールを投げることや走ることなどレクリエーション的なコミュニケーションづくりをする必要を感

じ、保育園に対する取り組みも始めている。

スポーツの力が様々なことに影響することを、学校と地域、家庭の中で語り合うことが必要だと考える。

希望郷いわて国体の結果について、報告する。

(事務局)

希望郷いわて国体の結果について、資料2に基づき、説明。

(委員)

今年度、山梨県でミニ国体が開催されたことが、順位の上がった要因となっているのか。

(事務局)

本県でミニ国体が開催されたことで、普段練習している会場で競技ができたことや山梨の暑い気候に慣れていたことなどから、予選を通過した者が多かったと考えられる。

(委員)

本県の人口規模から考えると、競技力の面では全国で1位ではないかと思う。しかし、山梨県の競技施設は、全国と比較して、あまりすばらしいとは感じない。施設環境の整備にもう少し力を入れていただければ、選手の育成や全国からの合宿の誘致が進むのではないかと。合宿を受け入れられれば、山梨を訪れる者が増えるし、競技をしている者の刺激にもなるのではないかと。

(事務局)

山梨県のほとんどの競技施設は、昭和61年のかいじ国体に合わせて整備されたもので、整備から30年以上経っている。厳しい財政事情を勘案し、使用できるものはできるだけ使用し、計画的に整備していくことを考えている。施設の整備については、総合球技場やプールの整備についての要望が出されている。合宿誘致については、富士北麓公園におけるラグビーや陸上競技の合宿誘致の可能性を高めるため、施設整備を進めている。限られた財源のため、できることとできないことはあるが、優先順位を付け、取り組みを進めていく。

(委員)

国体の成績に関し、少年と成年の得点のデータはありますか。

(事務局)

今年の国体では、得点順に、成年男子が 191.75 点、少年男子が 143.25 点、少年女子が 113.25 点、成年女子が 105.25 点となっている。

過去 2 年の点数との比較では、成年男子については、2 年前の国体では 142 点、昨年の国体では 130.5 点であり、かなり点数が伸びた。少年男子については、2 年前の国体では 97.5 点、昨年の国体では 128.5 点と、右肩上がりに伸びている。成年女子については、2 年前の国体では 126 点、昨年の国体では 66 点。少年女子については、2 年前の国体では 126.5 点、昨年の国体では 93.5 点と、それぞれ、昨年に比べ点数が伸びた。

(委員)

山梨県で、国体を開催する可能性はあるか。

(事務局)

国体は、全国を東日本地区・中日本地区・西日本地区の 3 つのブロックに分け、各都道府県の持ち回りで開催されている。山梨県は東日本地区に属しており、この地区で 2 回目の国体を開催していないのは、群馬県と本県のみなので、今後、本県が国体を開催しないということはない。

(委員)

国体の開催により、スポーツが盛んになれば、子ども達も自然にスポーツを愛するようになる。是非、山梨県で開催して欲しい。

(事務局)

国体の開催は、施設整備、選手強化や健康に対する意識づくりのとても良いきっかけとなる。各都道府県の持ち回りと言うこともあるが、開催に向けた取り組みを進めていきたい。

(以上)